

あの丸木橋をわたると  
だれもいそがない 村がある  
まめのつるに まめのはな  
こうしのつのに とまる雲  
そのままに そのままで  
かげぼうしになる 村のはなし

『だれもいそがない村』より



### 岸田衿子(1929 - 2011)

劇作家・岸田國士が大学村に山荘を建てたことから、幼い頃から家族で来訪。人生後半は季節を問わず定住し、地元の人々とも交流した。詩人、童話作家として、周辺の自然や小動物をテーマにした作品が多く、エッセイなどでも北軽井沢について書き記したものが多く。妹・今日子との共著「ふたりの山小屋だより」に、大学村の当初の頃の様子が詳しく描かれている。



### 谷川俊太郎(1931 - )

のちの法政大学の総長でもあり野上夫妻と親しかった哲学者の父・谷川徹三が昭和5年に大学村に山荘を建てたことから、生まれた翌年から戦時中を除いて毎夏のように北軽井沢に滞在。岸田衿子・今日子姉妹とは山荘での幼馴染。21歳のときのデビュー作「二十億光年の孤独」にも北軽井沢で創作した詩が収められており、詩作の原点に北軽井沢の自然や風土があったことをエッセイなどでも触れている。

からまつの変わらない実直と  
しらかばの若い思想と  
浅間の美しいわがままと  
そしてそれらすべての歌の中を  
僕の感傷が跳ねてゆく  
(その時突然の驟雨だ)

「二十億光年の孤独」  
『山荘だより3』より

写真提供：軽井沢高原文庫



### 野上弥生子(1885 - 1985)

夏目漱石との出会いにより文学に開眼し、明治・大正・昭和を生き抜き、99歳まで現役の作家として描き続けた女流文学者。夫・野上豊一郎とともに大学村創設時より村を訪れ、戦時中や戦後に単身になって以降も冬でも滞在した。「迷路」「秀吉と利休」「森」など長編のほとんどを北軽井沢山荘で執筆した。〈お離れ〉として愛用した山荘敷地内にあった茅葺き屋根の茶室は、1996年、軽井沢高原文庫に移築、公開されている。

浅間山を中心とする一帯の外輪山を片側にもち、反対の方には四阿と白根をどっかり並んで座らせ、それぞれの視野の低まった鞍部で、丁度海の浪と浪をつなぐように巧みにつなぎ合わせながら、遙かな丸い縁を周りにつくっている高原は、どちらを向いても山の眺めはゆたかであり、わけても浅間の煙の変化じみたおもしろさと美しさはいよいよもなかった。

短編『山姥』より



## vol.33 北軽井沢を愛した作家たち

### 「大学村」から生まれた文学

昭和の初めに開かれて以降  
北軽井沢の法政大学村(通称「大学村」)には  
大学教授や作家など多くの文学者が集い、  
ここから著名な作品が誕生しました。  
作家たちを惹きつけた北軽井沢の魅力とは  
なんだったのか…ゆかりの作品の数々から、  
その秘密を探ってみませんか？

理想的な教育とコミュニティを  
目指して開かれた「学者村」

避暑地・北軽井沢の始まりは、大正12年の「一匡邑」に続き、昭和3年、法政大学の学長・松室致が大学の教職員と学生を中心に、理想的な教育と共同生活の場を目指して創立した「法政大学村」に端を発すると言えるでしょう。

松室は、大正9年に草津軽便鉄道株式会社より取得していた273ヘクタール

の土地を教職員に分譲しようと、英文学者で当時大学の予科長だった野上豊一郎に計画と運営を委託します。その頃の北軽井沢周辺はまだ森もなく荒れた草原が広がるばかりだったため、教職員のなかには、「こんな土地はタダでもごめんだ！」と断った者もあったそうですが、野上の誘いに徐々に申込者も増え、昭和3年、第1区40戸の山荘が建てられ、ここに「法政大学村」が発足します。1区画は5百坪(所有は2区画まで)、一坪一円で分譲され、その代金は毎月十円(50ヶ月)の月賦で支払うこともできました。創立当初から自立と互助を大切に、村会制をとり、村長のほか選挙により村会議員が選ばれました。村民は法政大学文科系の教員が中心でしたが、野上教授の山荘を訪れた岩波茂雄(岩波書店創業者)がこの地をひと目見て気に入る村民になったことなどから、法政大学以外の学者や芸術家が多く参加するようになります。初期の村民には、安倍能成、谷川徹三、野上弥生子(野上豊一郎夫人)、田辺元、津田左右吉、岸田國士らが名を連ねています。外国文学研究者が多かったことから「辞書村」とも呼ばれました。



松室致氏の功績をたたえ、1959(昭和34)年に旧北軽井沢駅舎前に建立された「北軽井沢開発の碑」。碑文は安倍能成学習院長によるもの。

◎今回紹介したのは… 北軽井沢を愛した作家たち

参考資料:「軽井沢町誌」、「大学村七十年誌」(社団法人北軽井沢大学村組合)、「法政大学」ホームページ

行ってきました。  
昨年、開村90周年を迎えた大学村。ひとつの別荘地がこれだけ長く自治を継続し、またそこから著名な作品が多く輩出されているというのは、全国的にも稀有なことです。村内の道路は舗装せずに開村当時の景観をなるべく維持し、「騒音を立てない」「午前中は他家を訪問しない」といった不文律も継承されるなど、文学者たちの愛した「村」の姿は、今も変わらず残されています。

戦後も、岸田衿子・今日子姉妹や谷川俊太郎、芥川比呂志(俳優)・也寸志(作曲家)兄弟など、大学村で青春時代を過ごした二世などが、引き続き当地で多くの時間を過ごし、そこに集まる文化人らの交流によりアカデミックで自治的な雰囲気も継承されていきます。大江健三郎や佐野洋子、近年では長嶋有といった作家も大学村を好み、当地で創作活動を行って

日本を代表する作品を育んだ  
北軽井沢独自の山荘文化

創設から大学関係者が関わってきた「法政大学村」(のちに通称「大学村」)は、戦前から戦後にかけて、村民たちのおもに夏の間の創作の場であるとともに、知識人たちが集まるサロンとして活気を呈しました。草軽鉄道の「北軽井沢駅」や、その後観光スポットとして賑わった照月湖、北軽小学校の前身の第三分教場など、町や北軽井沢地区にとって大切な施設や場所の誕生とも、大学村は大きく関わっています。また、戦時中は東京からの疎開先として、女性や子供たちなどの家族が山荘で日常生活を送るようになり、その様子は野上弥生子の日記などにも記されています。

この冬の読書におすすめ!  
北軽井沢が舞台となっている作品



野上弥生子短編集

加賀乙彦編／岩波文庫

北軽井沢を舞台とした長編小説もありますが、まずは短編から…。この短編集には、自身をモデルとした作家と野山の自然や地元暮らしの老人との触れ合いを描いた「山姥」、狐の飼育という仕事を通して北軽井沢を書いた「狐」などが収められている。



二十億光年の孤独

谷川俊太郎／集英社文庫

いまや知らない人はいない日本を代表する詩人のデビュー作も、北軽井沢が発祥の地! 10代の(谷川少年)のみずみずしい感性は、今読んでも新しい。80歳を過ぎて夏には単身北軽井沢の山荘を訪れ、昨年は大学村開村90周年企画として北軽井沢ミュージックホールで朗読会&ライブを行った。



森のはるなつあきふゆ

～オシギッパのもりでみつけた

岸田衿子(文)古矢一穂(絵)／ポプラ社

地蔵川周辺のオシギッパ(押切際)の森を舞台に、四季で移り変わる自然の風景や動植物について描いた絵本。細かな描写の一つ一つに、北軽井沢の自然をこよなく愛した岸田衿子さんと、画家の古矢一穂さんの優しい眼差しが感じられる。小さなお子さんと一緒にご家族で。



神も仏もありませぬ

佐野洋子／筑摩書房

「100万回生きたねこ」で知られる絵本作家の佐野洋子さんも北軽井沢を愛した作家のひとり。1998年から2003年までは通年で滞在し、その頃の暮らしぶりについて描かれたのがこのエッセイ。ユーモアたっぷりの筆致に思わず笑いがこぼれるほか、実在の店や人が実名で出てくるため住民には必見!



火山のふもとで

松家仁之／新潮社

新潮社の編集者だった著者の小説家としてのデビュー作。若い建築家がひと夏を過ごす(青栗村)の舞台が大学村であり、昭和中期の村の様子や草軽鉄道の回想シーンなども登場する。著者の松家仁之さん自身は浅間南麓に山荘があり、軽井沢・北軽井沢周辺の独特の雰囲気も巧みに捉えられている。



ジャージの二人

長嶋有／集英社文庫

のちに堺雅人主演の映画でも話題となった小説。著者の長嶋有さんも祖母や父の時代から大学村に山荘があり、子供の頃から通っていた経緯を持つ。特に劇的なことは起こらない、淡々とした山荘での日々が、より「北軽らしさ」をあらわしている。作中には岸田衿子さんをモデルとした人物も登場し、大学村内での交流も描かれる。

ふるさと  
再発見

[33]

—文化財だより—

平成27年度、上湯原の石川原遺跡の発掘調査で天明泥流により埋没した不動院と観音堂と推定され



る遺構が発見されました。この遺構の位置関係は、不動院の住職が助かった様子が紹介されている古文書「天明三年七月砂降候以後之記録」(新田郡世良田村毛呂義卿)の記述と一致することが判明しました。  
「八日の四ツ半(11時)前、泥押しが来る。昼夜の山響きで気分が優れず、少し眠っていた住職は火石や流木が岩に当たる音で目が覚める。寺も揺れていた。本尊を確かめようと衣を着て裏の障子を開けると、竹藪が川に落ち、引き込まれていくのが見えた。すぐに駆け出すと同時に寺が倒れた。寺より約一町(100m)南に山があり、寺と山との間に観音堂がある。観音堂を通り過ぎると堂が倒れる。山の取っ付きに石垣があり、長さが十五間(30m)位ある。石垣の下は藪の斜面になっている。ここも崩れるだろうと思ひ、何とか駆け抜けると泥水が打ちかかる音がした。振り返るとすぐ後ろまで泥が押し上げていた。ただ衣一つで死を遁れた」(次回につづく)